

※解答欄が足りない場合は、ワークシート裏面に書くこと

2020年1月27日朝刊

真珠湾の爆撃の報を聴くときは――

吉井勇 幻の原稿発見

「のち短し恋せよ女(おとめ)」。『ソンドラの唄』の作詞で知られる歌人吉井勇(1886～1960年)が大正戦争末期にまとめ、終戦時に破壊したとされていた未発表歌集「神杉かんすぎ」の直筆原稿が、京都府立京都学・歴史館(京都市左京区)で見つかったことが26日、分かった。

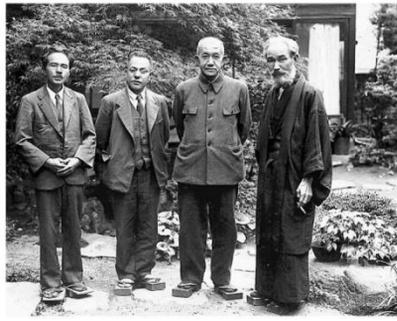
神杉は、戦意高揚を目的に出版社「八雲書店」が企画した「決戦歌集」シリーズの一つ。戦争末期、吉井や佐佐木信綱ら10人程度が歌集作成を依頼されたが、終戦で刊行中止。今まで高麗茂吉の歌集「万軍(ばんぐん)」しか存在が確認されていなかった。戦後、ほほほ同じ人選で別の「金泥(こんでい)」を含む「新日本歌集」シリーズが出版された。

調査した田坂憲二・元慶応大教授(国文学)は、「さやかな日常の短歌も含まれ、当時の吉井の揺れる心理がうかがえる。戦争と文学の関係を考える上で貴重な資料だ」と評述している。原稿用紙30枚は、吉井の遺族が府立総合資料館(現歴史館)に寄贈した膨大な遺品の中から見つかった。短歌は複数の歌集などから歌った「真珠湾の爆撃」(ほ

未発表の決戦歌集「神杉」



未発表歌集「神杉」の直筆原稿



歌人吉井勇(右から2人目)ら。1944年(富山県立吉井勇記念館提供)

戦意高揚、終戦で刊行中止

くげき)の報(ほう)を聴くときは狭庭(さには)の竹も鳴りか出つらぬ」など188首をペン書きしている。

静岡県立大の細川光洋教授(日本近代文学)が翻刻した吉井の日記によると、京都市から富山県八尾町(現富山市)に疎開していた1945年7月30日、八雲書店の依頼を受けた。直たのは未着された初稿とみられる。

原稿には「胡麻(ごま)があり、15日午前に再び完と食た(う)べは夕餉(ゆふく)ふげ、楽しくわがころ足ら」といった古帯の心の機微を表したのも含まれ、戦意を鼓舞する短歌ばかり集めた茂吉の「万軍」に比べ、戦時下の生活を静かに見つめている印象が強い。

細川教授は「神杉は、短歌を通して戦時を生きた人々の心情を率直に代弁する」と同時に、自身も戦争に翻弄(ほんろう)され、表に出せない複雑な思いを抱いていたことを象徴する歌集だと話している。

①戦争と文学の関連性について、考えるところを述べよ。ただし、日本語に限らない。

②新聞記事中の「真珠湾～」と「胡麻あへの～」の和歌を読み比べ、考えるところを述べよ。

③吉井勇の文学史事項を調べてまとめよ。

年 組 名前

作問者: NIEアドバイザー 実石 克巳(静岡県立静岡高校 教諭)

(高校/国語)

<参考>①=文学、政治学に関する問題、②=日本文学に関する問題、③=日本文学に関する問題